

第203回山口西田読書会プロトコル

今回は前回プロトコルを巡っての議論に終始した。その議論を踏まえて前回の部分を改めて解釈すると以下のようになると思われる。議論の中心は「統一の極致」と「客観的統一」である。

西田は色から始める。赤から青の色の推移を見る時、赤でもあり赤でもないものを見ていることになるから「我々が色の推移を見る時、単に色を見るという意味に於いて見ることのできないものを見て居る」（4,89）ことになる。同様に塩は白くて辛い等の性質をもつが、「我々が物を見る」というのもそれらの性質を統一しているものを見ているのである。それは白くも辛くもあり白くも辛くもないものである。話は絵画にまで及ぶ。絵画にも中心がある。「中心は意味の集まる所」であり、それは「考えられた統一ではなくして、見られたる統一である」、しかも「心に於いて」と言われる。そうしてそのようにして見られた「統一が動かすべからざるものであればある程、客観的である、思惟を離るれば離れる程、外に於いて見られる」と言われる。西田がここに言う芸術体験は宗教体験に類したもので、この統一は「最大最深の統一」ということになるであろう。思い（考え）が破れたときに「心に於いて」見られるもの、聞こえるものが「客観的」なものである。

ところで上の絵画の例について、同じことは哲学書を読む場合も言えるだろう。西田は若い弟子によく「大きな思想家というものには、その思想家独自の考え方の『こつ』というようなものがある。哲学の思想がわかるためには、その『こつ』を捕まえることが必要である」（『西谷啓治著作集第九巻』93頁）と言われたそうである。私の師である辻村先生も「哲学者が考えたことではなく、考えようとしたことを考える」ことの必要を説かれていた。西田のいう「こつ」や辻村のいう「哲学者が考えようとしたこと」が「統一点」であり、「中心」である。そうしたもののとの出会いは生涯かかって考えて行くものとの出会いでもある。

さてこの「統一点」は部分にして全体である。「具体的意識」においては「物の統一点」は「意識の統一点、即ち注意の焦点」である。この一点に「種々の感覚的性質が結合して居ると見るには、我々は此点を界として一つの感覚的性質から、他の感覚的性質に移り行くことができねばならぬ、此一点が種々なる連続の結合点となる」。すなわち注意が色から形に移っても物の統一点が「界」となって、ここから注意が離れることはない。この「界」は『善の研究』で「統一的或るもの」「一般的なるもの」と言われたものである。他の例で言えば、水を飲みたいと思った時はこの目的観念が「一般的なるもの」である。それが「傾向の感情」として「注意を指導」することになる。こうして我々はコップに目をやり、蛇口に目をやる。

ここでテキストでは「我々の見て居る現在は無限に深いものと考えることができる」と述べられる。何故か。テキストでは「界」がひとまず「客観的統一」「高次的統一」と呼ばれている。物の性質に次々注意を転じて「物の統一」を離れないということを念頭に置いている。しかしそうした「外に客観的統一と見るものも、具体的なる主観的統一」である、と以前言われたことが繰り返される。その直後「此の如き統一の極致に於いて、客観的統一の中に主観的統一が含まれた時、主客合一して一つの具体的統一となる。かかる統一点が即ち現在である」と言われる。この「現在」が「無限に深い」のである。その前に「統一の極致」と「客観的統一」について考察しなければならない。

「統一の極致」とはさしあたり客観的には物の統一が宇宙の統一にまで拡大されることを言っている。主観的には意識の統一のことであるが、これは例えば「水を飲みたい」といった目的観念が拡大されて、さしあたり善そのものを目的とする（それは同時に真の自己を知ることである）ことを言っているであろう。そうしてその「統一の極致に於いて客観的統一の中に主

観的統一が含まれる」とある。これは善（真の自己）を追求する意志が挫折して神の内に再生した自己を見出すことを意味していると考えられる。こう考えるのには根拠がある。『善の研究』第四編「宗教」第一章「宗教的要求」第3,4段落にほとんど同内容の叙述があるからである。そこでは「絶対的統一は唯全然主観的統一を棄てて客観的統一に一致することにより得られる」（4-1-3）とあり、意識の「統一の極まる所が我々の所謂客観的實在というもので、この統一は主客の合一に至ってその頂点に達するのである。客観的實在というのも主観的意識を離れて別に存在するのではない、意識統一の結果、疑わんとして疑う能わず、求めんと欲してこれ以上に求むるの途なきものを云うのである」（4-1-4）と言われている。こうして「現在」とは「すべての経験の最も具体的なる統一点である、全体験の総合点である。我々は時に従って現在を離れて行くのではない、唯現在の奥深く進み行くのである」と締めくくられる。